能登半島地震復興へ 思い込め

山々が光に照らされた姿は、はっと息をのむほど美しく、見る人たちを明気づけます。立山と白山のそんな美しく力強い姿をモチーフにした北陸応援もよう「HAREYAMA（晴れ山）」が完成しました。ことし10周年を迎えた富山もようプロジェクトの15番目のもようです。能登半島地震以降、率先して被災地支援を続けてきた富山市の段ボールメーカー、サクラパックスの橋本淳社長が「デザインの力で、北陸を盛り上げられないか」と同プロジェクトに提案したのがきっかけで、誕生しました。橋本社長に復興活動への思いや、もようへの期待を聞きました。

企画提案の橋本淳氏（サクラパックス社長）に聞く

はしもと・あつし　1971年富山市生まれ。法政大経営学部卒。商社勤務や米国留学を経て、96年にサクラパックス入社。2008年に社長に就いた。11年には日本青年会議所副会頭を務め、防災担当として東日本大震災の復興に取り組んだ。22年から富山商工会議所副会頭。

「北陸は一つ」と感じる

――今回の立山と白山をモチーフにした「北陸応援もようを」をどうご覧になりますか。

このデザインは立山も白山も混ざり合って一つの画面を構成していますね。そこが素晴らしい。北陸は一つだという感覚を持つことが大事だと思います。だから、このデザインを見た時に「美しいなあ」って感じることは素敵ですが、さらに能登半島地震を思い出していただきたい。そして北陸全体に誇りを持ってもらいたいです。

段ボールで社会貢献

――能登半島地震が発生し、かなり早い段階で石川県の現地を訪れたそうですね。

1月4日ですね。段ボールベッドやパーティションを積めるだけ積んで現地に向かいました。道路の状況が分からなかったので、トラックではなくミニバンで七尾まで行きました。難しかったのは、行政との連携ですね。避難所の床は硬くて冷たいので、高齢の方は耐えられても2日程度と言われています。我々は災害支援の知見があるから早急に快適性を高めないといけないと訴えるのですが、役所も対応できる状況ではありません。だから直接避難所を回って届けました。

もちろん、被災者の方からは真っ先にでもうえまもなく、足りない分は翌日からもずっと届け続けました。結局、ベッドはトータルで1200個配りました。

▲支援物資を運ぶ橋本社長

――ネットでの情報発信も積極的ですね。

能登半島地震の記憶が北陸以外では徐々に薄れていくことに危機感を覚えましたので、「X（旧Twitter）の「段ボールでまもろう」防災（@smarol_bousai）というアカウントで、防災に役立つ豆知識の発信をしています。今では「フォロワーが1万人いて、100万回以上表示された投稿もあります。

▲段ボールでスリッパを作るワークショップ

発信し、運動を起こす

――今回の支援で特に意識したことは？

活動するだけでなく、運動を起こすことを大切にしました。今回の地震では、災害ボランティアの自粛ムードが見られない状況が続いています。我々は積極的にメディアに支援活動を取り上げてもらいました。売名行為と言われようとも構いません。結果として、活動が報道されることで、企業や団体から「どんなルートで被災地に行くのか」と問い合わせがたくさんありました。僕らだけが行動するのではなく、他の企業や団体、どう支援すればよいか分からない方々にも支援活動を波及させたいという強い思いがありました。

北陸を思うきっかけに

――北陸応援もようを生かして、どんな新アイテムを作られますか。

衛生用品を入れた防災ボックスと壁掛けのブラブリックボードです。ボードは部屋の中で眺めてもらい、北陸に思いを寄せ、応援していこうという気持ちになってもらいたいと作りました。

富山の人たちが防災意識を持ち始めたからだからこそ、富山以外の全国の人にこそ使ってもらいたいという思いもあります。県外に出張して名刺交換をして「北陸の会社」ということを伝えても、能登半島地震に言及してもらえる機会はぬっきり減りました。この「北陸応援もようを」のアイテムを全国的に発信することは、能登半島地震の記憶を風化させないことにもつながるでしょう。

能登半島地震で顕在化した問題はこの後、何年もかけながら日本全体で取り組むべき問題です。我々もまだやらないといけないことがあります。今回の地震では協定がないゆえにスムーズに物資を届けられないこともありました。行政との協定の内容を確認し、精度を高めたいです。そして、何か再び起こった時に率先して動いていきます。

――東日本大震災から被災地支援に力を入れているそうですね。

東日本大震災で現地に行った時に、NPO団体の方々からよく言われたのは「段ボールは宝物」という言葉です。避難所では立派なものはいりません。その点、段ボールは加工しやすい。椅子にも机にもなり、スリッパも作れます。不要になれば簡単に捨てられますし、加工しやすく、リサイクルもしやすいという段ボールの可能性を再認識させられました。

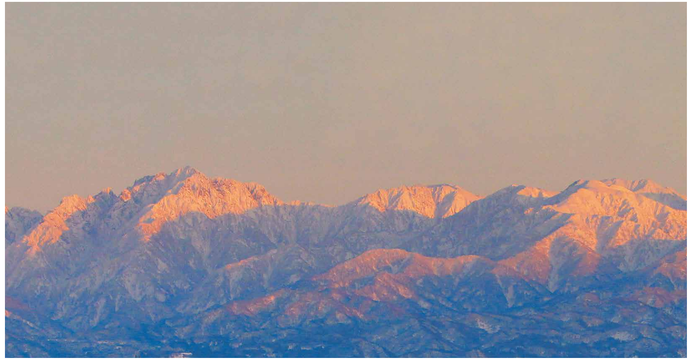
それ以上に、被災地で大変な思いをされている方々にちょっとしたことでありがとうと言われたことが印象的でした。段ボールで社会貢献ができることを痛感し、そこから誰かの笑顔のために生きることが自分の大きなテーマになりました。

この経験を持ち帰って、サクラパックスの強みである「段ボールと一緒に計」を生かして社会貢献をしようと決めました。東日本大震災からこれまで防災のノウハウを培い、セミナーやワークショップを数多く実施してきました。

だから今回の地震でも「うちがやらないで、どこが動くんだ」という気持ちが湧きました。

立山、白山 “晴れ山”は 心のよりどころ

▲夕日に輝く白山連峰　©白山市観光連盟



▲富山市の呉羽山展望台から望む夕映えが美しい立山連峰

一立山も白山も特別な存在一

北陸大学
国際コミュニティーション学部教授
立山信仰研究者
福江 充

――日本人はるか昔から、なぜ山を畏れ敬ってきたのでしょうか。

まず日本の国土の大部分が山です。しかし、薄暗い山は怖く、人々は「山の奥には魑魅魍魎（ちみもうりょう）がいる」と考えていました。死んだ人の魂の行き場所だとも思った。しかし同時に、山は自然の恵みを与えてくれる存在でもあります。水の源流はある、山菜もまきも採れます。だから、山を恐れながらも、そばで暮らし、畏敬の念を抱きました。それが山岳信仰につながるのです。

――立山や白山はどんな点が特別でしたか。

越中や能登は、平安貴族が暮らした奈良や京都といった都から、近かったのです。もちろん陸上交通の視点では遠いですが、奈良時代には既に日本海側の航路が発達していました。海上交通を使えば圧倒的に速い。

立山・白山のある北陸は海の幸もあれば、コメも採れます。平安貴族にとっては暮らしを豊かにしてくれる土地で、政治の影響が及ぶ範囲でした。

宗教者から見ても北陸は特別な場所です。平安時代には、立山や白山の火口湖の雪解け水で書いた法華経を山中に奉納しています。江戸時代には「富士山を加えた三霊山を巡礼する過酷な参詣旅行（三禅定）も盛んでした。

――貴族ではなく、庶民にまで浸透したのはなぜ。

立山は地獄谷の存在が大きいと言えます。平安時代の中期には立山地獄は生き地獄として、ある意味では「ラブンド下北」していました。今昔物語にも立山に関する説話が四つも登場しています。立山が火のイメージなら、白山は水のイメージ。庄川や手取川、九頭竜川の源として、水の神様がいる場所として親しまれました。

――能登の人々にも立山は特別な存在だったそうですね。

漁や航海する人にとって立山や白山は大切なランドマーク。自分の位置や天候状況を確認し、安全を確保するための目印とされていました。さらに昭和初期の証言で、能登から舟で立山に向かったという記録があります。常願寺川を上り、上滝あたりで降りて芦峅寺まで行ったのでしょう。

――北陸応援もようの印象は？

北陸はアジアの窓口でした。奈良時代には中国の東北地方を中心に栄えた渤海の使節の大切な拠点です。北前船が盛んになる江戸時代の前から、日本海交通の一員として日本を考えれば、北陸は日本の中心。北陸を復興できなければ、日本が日本でなくなります。

山登りは一歩ずつ。復興は大変なことだけれど、少しずつやっていくしかないと感じます。山々をモチーフにした北陸応援もようは、着実に歩み続ける登山者の姿にも重なります。

ふくえ（ふくだ）充　文学博士（金沢大）。30年以上にわたって立山信仰を研究し、立山博物館・高志の国文学館の学芸員を経て、2015年から北陸大（金沢市）で勤務。学生に日本史や宗教民俗学を教えながら、山岳信仰を研究を続け、当面は浄土真宗と山岳信仰の調査に取り組む。

15番目の富山もよう

北陸応援もよう「HAREYAMA（晴れ山）」

美しさを心に届ける

富山もようを手掛けるテキスタイルデザイナーの鈴木マサルさんは、2014年の1作目「TATEYAMA」の発表以来、ずっと富山を見つめ続けてきました。能登半島地震が起きてからは、ニュースに触れる度に「被災の当事者ではない自分がどう関わるべきなのか」と考えたといいます。そして2月末日、氷見市を訪ねました。1階が押しつぶされてしまった家屋、亀裂が入った道路、がらんと広がる観光スポットの駐車場――。町を見て回り、今回の創作の原点にたどり着きます。「とにかく美しいもの、見た人が無条件に『きれいだな』と思うものを描こう」と。

モチーフは、富山と石川の人々が心を寄せる立山と白山に決まりました。表現のヒントになったのが、夕日に照らされたピンク色の山々の写真でした。「山というより光が反射しているような雰囲気だな」と感じ、かつて印象派と呼ばれた画家たちが光を表現するのに用いた点描に行き着きました。「点描は美しさを表現することにつながっている。これなら見た人の心に入っていけるかもしれない」。立山と白山の峰々が、無数の点で浮かぶ「HAREYAMA（晴れ山）」が完成しました。

富山もようはことし10周年を迎えます。「何事も10年続けることは大変なこと。続けられたのは、必要とされたからで本当にうれしい」と鈴木さん。「この先も、時代に寄り添うようなもようができればいいですね」

▲雨天にもかかわらず富山を訪れた鈴木さん

テキスタイルデザイナー
鈴木マサル

1968年生まれ、千葉県出身。多摩美術大卒。テキスタイルを中心にグラフィックや建築空間などさまざまなシーンに向けてデザインを展開している。

【富山もようとは】

「富山のいいもの、もっとにしたい、富山をもっと好きになる」を合言葉に、県内のさまざまな魅力をパターンデザインにして暮らしを彩るプロジェクトが「富山もよう」です。これまで発表した柄や数々のグッズはホームページで紹介しています。富山もようグッズは、北日本新聞社2階喫茶店をはじめとする県内外30店舗以上で販売しています。

こちらの二次元コードからHPにアクセス

富山もようプロジェクトとサクラパックスは、「HAREYAMA」を使った商品の売り上げの一部を能登半島地震の被災地に寄付いたします。

©富山もようプロジェクト×北日本新聞社メディアビジネス局